

# 文体論の知見を入れた児童文学講読の試行的授業

考えを深める英語教育実践：Content では何を教え、どう評価するのか

鈴木 栄

## 1. 研究の背景

Burton (2018) の調査によると、英語の小説を読むことに関して、大学生は、ある種の期待を持っているが、学ぶ機会が与えられてこなかったことがわかった。教える側はというと、英語科に関する教職課程担当者の見解の調査(飯田他, 2019) 結果では、英文学作品に関して、「文学作品をきちんと理解しているか評価する手法がない」、「英語文学に関心を持つ学生が少なくなった」という回答があった。英語教育では CBI(Content-Based Instruction)や、CLIL(Content and Language Integrated Learning)という指導法で、「英語で何を教えるか」について議論される場合がある。前者では、環境問題、演説、人種問題、などが取り上げられ、後者では、体育や化学の授業を英語で一部おこなうような試みが行われている。EFL(English as Foreign Language)の環境にある日本では、英語を日常生活で使用する機会が限られているため、必修科目としての英語学習以外の自発的な学習は学習者に委ねられている。教室外や履修後に自立的に英語を使い続けてもらう機会になることを願い、英語の小説(novel)(Short, p.255)を授業に取り入れることで学習者の英語小説への興味・関心が広がることを期待し、大学生を対象にアクション・リサーチ(Nunan,1999)をおこなった。

## 2. 研究方法

学生の英語の小説に対する考え方や感じ方は授業(教え方)でポジティブなものに変化するか、英語の小説の解釈と感想は、文体論の知見を入れた分析方法を知る前と後では変化するか、学生は、英語の小説を原文で読む過程で、文体についての発見をすることで深い解釈をすることができるか、を研究課題とした。研究対象の学生におこなった英語の小説に対する意識調査の結果に基づき、テキストを選択した。次に、文体論の中から、テキスト理解のための項目を選択し、ワークシートを作成した。学生は、まず自力で小説を読み、ワークシートに書かれている内容理解に関する質問に答える。授業では、内容把握と同時に、文体論の項目について理解してから本文を再度読む。その後、2度目のワークシートへの回答をおこなう。学生の1回目と2回目のシートに書かれている内容から、学生の読みが深まったかを検証した。

### 2.1 英語の小説をどのように教えるか

Widdowson (1975) は、著書 *Stylistics and the Teaching of Literature* の中で、英語を母語としない学習者が英語で書かれた文学作品を読む場合には、特に、その作品の中に現れる言語使用(language use)を理解することで作品を鑑賞できるとし、Stylistics (文体論)こそが、英語という言語と英語文学を統合させる方法であると主張する。文学作品を文体論という眼鏡を通して読むという試みをおこなうため、原文をそのまま使用することにし、学習者が英語母語話者ではない場合には、作品の中に出てくる文化的な情報も作品を理解する上では重要な手がかりになるため、文化的な要素にも注目をさせることにした。

### 2.2 テキスト選択

文学に縁遠い学生対象である場合は、特に、「物語の面白さ」を重視してテキストを選ぶことが大切である(秦, 2017) ことに加え、教える側に関心をもつものであることが重要である。テキストに何をを使うかについては、学生が読んで困難を感じないものであること、教える側がテキストの内容を仲介して学生に学びや気づきを喚起したいものであること、編集されたテキストではなく、原文であり翻訳本が出ていないことを考慮した。選択したのは、ニュージーランドの国民的児童文学作家である Margaret Mahy の短編 *Chocolate Porridge* である。興味ある作品として児童文学を選んだ学生が一定数いたこと、読みやすいこと、ストーリーの中に教育的示唆(pedagogical implication)が含まれていることが選択した理由である。

### 2.3 教育的示唆

ある家族の週末の風景である。特別なことが起こるわけでもなく、どこの家族にも見られる午後の時間であるが、その中に、人間関係の機微、男女の役割、親子関係が織り込まれており、そこから学べることは、「共感」「回復力」「発想の転換」であり、いずれも現代社会を生きていく上で必要な人間力であると考えられる。男の子は料理ができない、料理をしない、と姉たちに決めつけられ台所から出された Timothy は、くじけることなく、自分で料理をする方法を探し出す。「ドロ団子作ってるんでしょ」と姉たちに言われながらも、Timothy は、諦めず、何か特別なもの(something unusual)を作ると発憤する。Timothy の父親は、Timothy が、自分が作った泥のポリッジを一体「誰」が食べるのだろうと不安を表明した時に、彼に共感し、ある考えを思いつく。

それは、運んできたリンゴの木を人に見立て命名することだった。"I've brought a permanent paying guest (永遠の下宿人) home with me."と言う。そして父親は、「木のために料理する日 (cooking day for trees)」を提案し、それもいいと考え始めた娘達に、今度は役割を交換してはどうかともちかけ物語は終わる。この物語の父親の役割は、社会における年長者、教師、親のあるべき役割を示している。人間関係において何らかの摩擦が起きた時に、両者の気持ちを考え、代案を提案し、両者の立場を尊重し、勝敗を決めるのではなく協調する仲介役を担う大人の姿である。このような暗黙のメッセージを、読者である学生が汲み取ってくれることが望むところである。

#### 2.4 読解への糸口 (文体論の視点から)

テキストのどこに注目をして読み進めるかについては、文体論の視点のいくつかを入れるために *Exploring the Language of Poems, Plays and Prose* (Short, 1996) の Chapter 9 (p. 255-286) を参考にした。Short が記している言語選択 (linguistic choices) に目を向けさせることにした。作者が選んだ言葉には何か作者の意図があるのか、選んだ言葉でどのような効果を期待していたのか、について気づかせるために4つの項目を選んだ。①反復(repetition)では、物語に繰り返し現れるモノやイメージに注目する。反復させることで読者に強い印象を与える。②読者がすでに知っている知識を利用する(schema-oriented language)(Short, 1988)。これによって読者が物語にすぐに入ることができる効果が期待される。③動詞の選択により登場人物の見方を読み取ることができる。④これ以外に、この物語では、主人公 Timothy の感情の動きが重要なポイントになるため、感情を表現する言葉に注目する。

### 3. 結果とまとめ

Rosenblatt (1987)が Transactional Theory (交流理論) で分類した efferent reading (遠心的読み) と、aesthetic reading (情操的な読み) を参考にし、感想・解釈に提示されたものを文体論の知見を得る前と後で分類した。efferent reading は、情報を掴む読み方であり、aesthetic reading は、読む経験に没頭し、感情移入や喜び、発見を感じる読み方である。第1回目の解釈と感想では、物語の流れを表面的に把握することはできていたようであるが、木を比喩的に宿泊人と表現した父親の心情や、そこに含まれたメッセージを理解するには至っていないことがわかった。文体論や内容解説の後の読み (構成要素の理解) では、楽しさ (感情) に関する記述があり、読みが私的な局面 (private aspects of sense, Rosenblatt, 1989, p.161) を含んでいることから、物語が自分のものになっていることがわかった。今回の調査を経て文学作品には様々な可能性があることがわかった。言語への気付き、言語の裏にある意図を読み取ること、物語が伝えたいことを掴み取ること、文化の違いへの気付き、など豊かな時間を学生たちと共有することができた。

大学に来るまでに英語の文学作品の授業をほとんど経験していない学習者が多いのは、高校までの教科書に登場する文学作品が激減していること、教える側も評価方法や教授法に不安を感じていることが原因であると考えられる。文学作品を教える授業研究や評価についての研究事例が増えることが期待される。少人数で文学テキストを読む輪読会、Literature Circles (LCs)、など、学習者が主体的に読解・分析をおこなう活動も参考になろう (今村・小野, 2014)。英語の文学作品の豊かな世界を多くの学習者が体験し、それを通して言語や文化を学ぶ楽しさを経験してほしいと願う。

#### 参考文献

- 飯田敦史他 (2019). 「教員養成課程コアカリキュラムの実態調査: 大学教職担当者の見解から」. *JACET-KANTO Journal*, vol.6. pp.23-41.
- 今村有希・小野章 (2014). 「文学テキストを用いた英文読解」 『中国地区英語教育学会研究紀要』, No.44, pp. 21-30
- 秦邦夫 (2017). 「小説への誘い: 物語を読むことの愉しみと難しさ」 日本英文学会 (関東支部) 編『教室の英文学』 研究社, pp. 205-214.
- Burton, S. (2016). An Overview of English-language Literature Study in Japan. *Lit Matters*, Issue 9.
- Mahy, M. (1973). *Wait for me!*: Dolphin Paperbacks.
- Nunan, D. (1999). *Second Language Teaching & Learning*. Cambridge University Press.
- Rosenblatt, L. M. (1978). *The Reader, the Text, the Poem: The Transactional Theory of the Literary Work*. Southern Illinois University Press.
- Short, M. (1996). *Exploring the Language of Poems, Plays and Prose*. Longman.
- Widdowson, H. G. (1975). *Stylistics and the Teaching of Literature*. Longman.